Yamaguchi University

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第22号（2006. 9）

高校生・大学生の生活技能に関する実践・意欲

入江　和夫・江口　万友*

High School Student's and University Student's Practice and Desire concerning Housework Skill

IRIE Kazuo and EGUCHI Mayu*

(Received July 20, 2006)

キーワード：生活技能　家事技能　家庭科教育　男女

はじめに

今日の日本は「核家族化」「子ども数の減少」「女性の社会進出」「家事労働の激減」「父親の存在感の希薄化」など家庭生活の質の変化が「家庭生活の意義の軽視」や「家族への意識低下」などの問題をもたらしていると指摘[1)]されている。“家庭”を扱う家庭科は子どもたちがこのような問題に対応できる力を育む教科である。

小学校家庭科[2)]において昭和31年～現在まで、男女が共に同じ内容を学習している。中学校技術・家庭科において昭和33年～平成４年まで男子は主に工科的内容を、女子は家庭的内容を学習した。高等学校家庭においても昭和31年～平成３年まで男子は「家庭一般」を必修科目として履修できなかった。

昭和62年教育課程審議会は小・中・高等学校「家庭科」に共通する改善の基本方針として「男女が協力して家庭生活を築きあげる能力を育てること」を平成元年度の学習指導要領の改訂に反映させた。その結果、中学校では男女が共に家庭科の「家庭生活」「食物」を履修し、高等学校でも男女が「家庭一般」を必修科目として履修することになった。このことにより小学校から高校まで、男女は同じ家庭科の内容を学習できることになった。ここで中学校「家庭生活」の領域に注目すると、「家庭の仕事は家庭の生活を円滑にするために直接かかわってくるものであることに気づかせ、重要性を認識させる」とあり、円滑な家庭生活には家庭の仕事が重要であることを述べている。すなわち家庭生活とは男女が協力して築き上げるものであり、それがスムーズにいくためには家庭の仕事を男女が実践できなければならない。この学習のために家庭科がある。従ってこの家庭科を学習してきた男女による生活技能の実践についての性差は現れにくいのではないかと考えられる。日本家庭科教育学会では2001年に全国の高校２年生を対象に家庭生活について調査をおこなっている。この高校生とは平成元年度学習指導要領改訂の家庭科を小学校から高校まで学習している。

そこで、この調査結果を利用するとともに、同様の家庭科を学習してきた大学生の男女を対象に、食生活、衣生活などの生活技能の実践程度や意欲を明らかにすることを目的と

＊豊国高等学校教諭

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

して、アンケート調査し、分析することにした。大学生を選んだ理由は一人暮らしの経験の有無による影響を把握するためである。大学生に関して得られた結果については、今後の大学の家庭科授業を改善する観点から一考した。

方　法

1　調査について

1）「食物」「被服」領域の実践状況程度「いつもする」「ときどきする」「あまりしない」「しない」の4段階

2）山口大学教育学部生による生活技能の実践は帰省時

2　調査日時

2003年10月20日：大学生

2001年９月：高校生（日本家庭科教育学会）

3　対象

1）山口大学教育学部２年生　男子42名　女子92名

2）全国高校２年生　男子1291名　女子1702名『児童・生徒の生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築ー家庭生活についての全国調査の結果ー』[3)]

結果と考察

ここでは、食生活・衣生活の技能項目について、実践程度を「いつもする」「ときどきする」「あまりしない」「しない」の４段階で回答させ、前者２項目を「する」とし、後者２項目を「しない」のカテゴリーとし、高校生と大学生間、男女間の違いを把握するため２×２カイ自乗検定をおこなった。その意欲を把握するため「もっと上手にできるようになりたいこと」、およびその「理由」を複数回答で尋ねた。

1　生活技能の実践

1）食生活

①包丁で食べ物を切る

食生活に関わる仕事として「包丁で食べ物を切る」は小学校家庭科以降学習している内容である。そのことに関してどの程度、家庭で実践しているのだろうか、高校・大学生間及び男女間での違いを明らかにすることにした。結果を図１に示した。

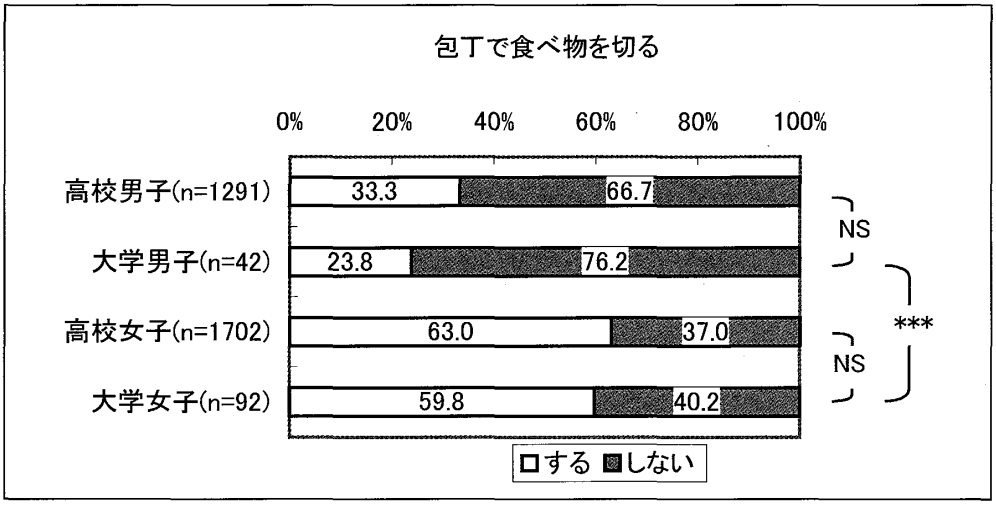

図１「包丁で食べ物を切る」　*** $p<0.001$　（２×２カイ自乗検定）

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

男子に注目すると「包丁で食べ物を切る」を実践していた高校生では33.3%（430人）、大学生では23.8%（10人）であり、大半の男子は家庭で実践しておらず、高校生、大学生間に実践度の違いは見られなかった。次に女子に注目する。高校生では63.0%（1073人）、大学生では59.8%（55人）であり、両者とも過半数を越えて「包丁で食べ物を切る」を実践し、高校生、大学生間に違いは見られなかった。大学生は一人暮らしの経験があるにも関わらず自分の家庭では実践していなかった。

大学生のみ男女間の違いを注目していく（以下同様）。「包丁で食べ物を切る」女子の数は男子の2.5倍であった。対象者が今まで受けて来た家庭科教育では家の仕事とは家庭の生活を円滑にする役割がある。特に男子はこの認識が不十分である。帰省すれば、大学生は家族の影響を受ける。そこでは男子は家事をしなくてもかまわない、女子はしてあたりまえの雰囲気があるのではないだろうか。もし、そうであれば家の仕事の意味づけを家庭まで認識させる学習が必要であろう。大学ではこの結果を考えさせるような授業を行いたい。

②食器を洗う

「食器を洗う」は食事の後片付けであり、親子が共にすることによってコミュニケーションの機会を確保できる。結果を図2に示した。

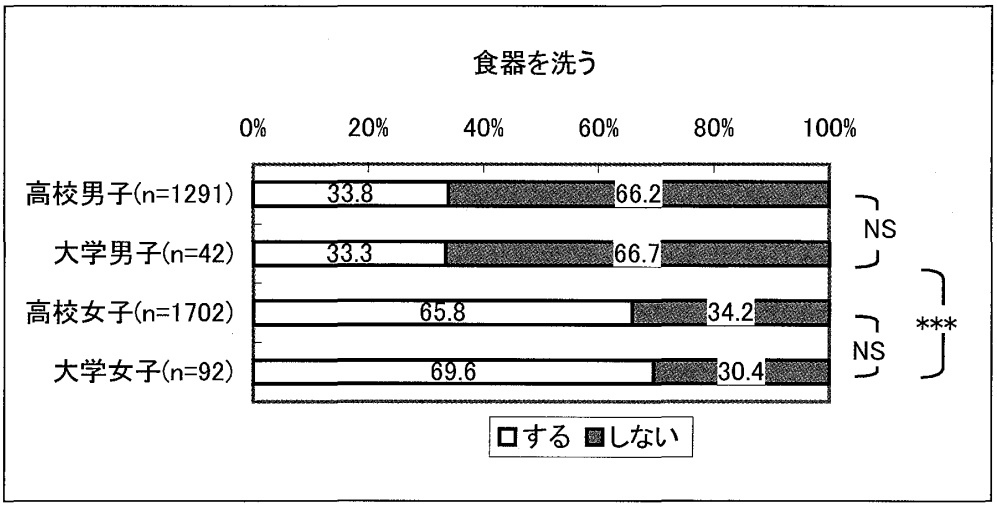

図2「食器を洗う」 *** p<0.001 （2×2カイ自乗検定）

男子の実践について見ていく。高校生では33.8%（437人）、大学生では33.3%（14人）であり、高校生と大学生との間には有意な差はなく、全体の3割が実践しているに過ぎなかった。女子について、高校生では65.8%（1120人）、大学生では69.6%（64人）であり、高校生と大学生との間には有意な差はなく、全体の6割が「食器を洗う」を実践していた。大学生の男女とも「包丁で食べ物を切る」に比べ、約10%増加している。それは「食器を洗う」仕事は実践しやすいからの理由も考えられるが、このことが家族とのコミュニケーションの機会になると考えているかもしれない。

大学生について注目する。「食器を洗う」を実践している女子は男子に比べ2.1倍多い。「食器を洗う」は女の仕事という固定観念を払拭させなければならない。この仕事は親と語らいながら実践することが大切であり、親子関係の理解にも役立つ。このことを大学の家庭科教育で理解させ、積極的に男子を参加させていく必要がある。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

③フライパンや鍋を使って料理する

「フライパンや鍋を使って料理する」ことは食事作りの幅を広げるものである。結果を図3に示した。

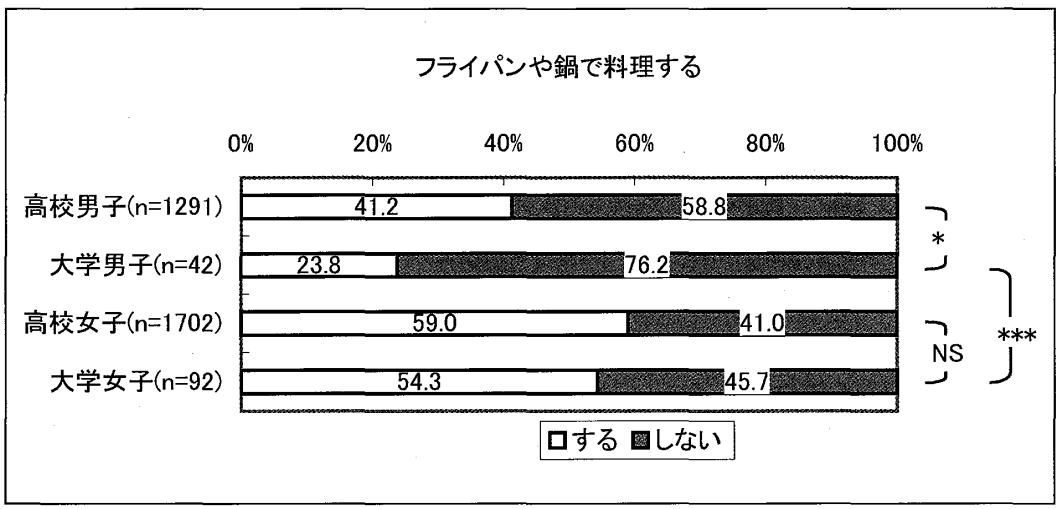

図3「フライパンや鍋を使って料理する」 *p<0.05 ***p<0.001 (2×2カイ自乗検定)

男子の実践について見ていく。高校生では41.2%(532人)、大学生では23.8%(10人)であり、「フライパンや鍋を使って料理する」大学生は高校生より有意に少なく、2割の大学生しか実践していなかった。女子について高校生では59.0%(1004人)、大学生では54.3%(50人)であり、過半数以上の高校生と大学生が実践していた。男女とも、この実施率は「包丁で食べ物を切る」と同じ程度であり、「食器を洗う」実践に比べ10%低い。

大学生の男女について注目する。「フライパンや鍋に使って料理する」のは圧倒的に女子の方が多く、2.3倍である。この技能は男女とも同じ学習の機会があったはずである。にもかかわらず男子はほとんど実践していない。せっかく身に着けた技能を家族に披露することで、コミュニケーションの機会や楽しい団欒が実現するはずである。このことを大学の授業で意識化させなければならない。

④家族の夕食を作る

家族の夕食を作ることは食事作りの全過程を担うとともに家族のことを考えた食事作りをすることになる。また、夕食とは家族団らんの場でもある。結果を図4に示した。

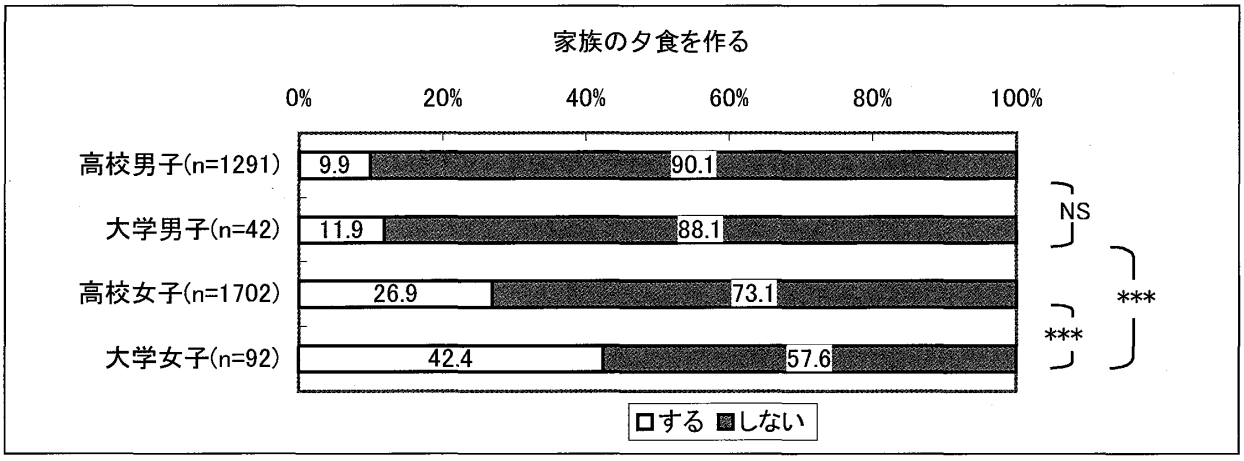

図4「家族の夕食を作る」 ***p<0.001 (2×2カイ自乗検定)

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

男子の実践について見ていく。「家族の夕食を作る」高校生では9.9%（128人）、大学生では11.9%（5人）であり、ほとんどが「家族の夕食を作る」ことをしていない。女子について、高校生では26.9%（458人）が、大学生では42.4%（39人）が「家族の夕食を作る」実践をし、大学生は高校生より多いが半数以下であった。

大学生について注目すると、女子の方が圧倒的に実践している割合が多く、3.6倍であった。食事に関する生活技能の中で「家族の夕食を作る」は最も実践度が低かった。夕食づくりは単に生活技能だけではない。このことを通して、家族の好きな食べ物や味付け、共に調理をすることによるコミュニケーションづくりなどが実現できるのである。小・中・高等学校家庭科の改訂で柱とした「男女が協力して家庭生活を築きあげる能力を育てること」はあまりにもなされていない。家事を男子もする、実践率をアップさせる、教師によるこのような意図の理解、学習教材が重要である。

2）衣生活

①洗濯機で衣服を洗濯する

「洗濯機で衣服の洗濯をする」は、衛生的な生活に必須である。現在、洗濯機は全自動であり、ほとんど手間はかからない。結果を図5に示した。

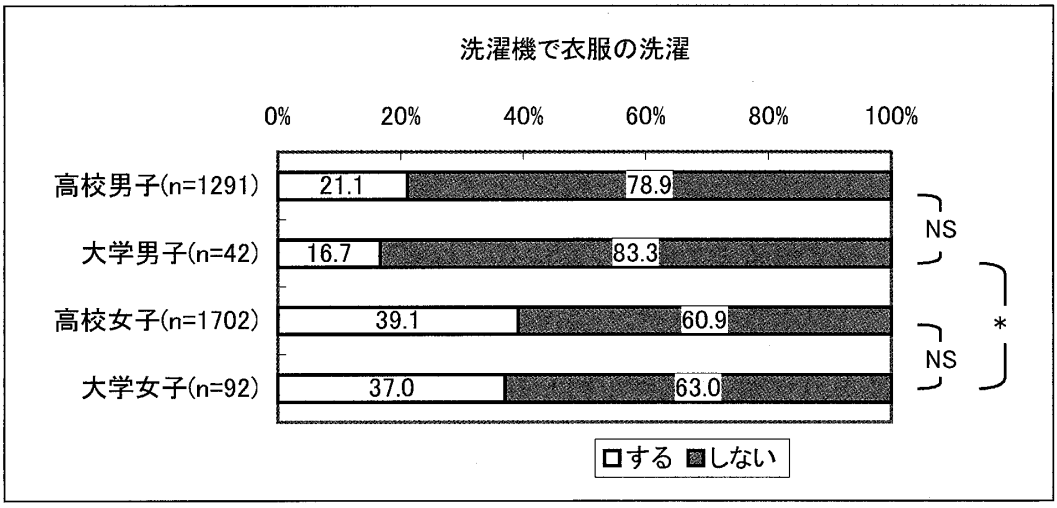

図5「衣服の洗濯」　＊p<0.05　（2×2カイ自乗検定）

男子の実践について見ていく。高校生では21.1%（272人）、大学生では16.7%（7人）であり、高校生と大学生との間には有意な差はない。高校生では母親がこれをしてくれるに違いない。大学生男子が帰省した場合でも、洗濯をほとんど実践していない。次に女子について、高校生と大学生の違いはなく約4割程度が実践している。

大学生男女について注目すると、女子の方が実践している割合が多く、2.2倍であった。食事関連は女子において、すべて過半数以上が実践しているにもかかわらず、洗濯の実践は低い。洗濯を単に“仕事”と捉え、帰省した際に、親に任せてしまうのだろうか。しかし、家事とは親が行うものではない。家事は家族が円滑に機能するために必要なものである。その一端を子供たちが担うことで家族の一員であるという帰属観が生まれる。それは家庭教育力をもった家庭建設の基盤であり、この意識が足りない。

②洗濯物をたたむ

「洗濯物をたたむ」はもっとも簡単な仕事である。その結果を図6に示した。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

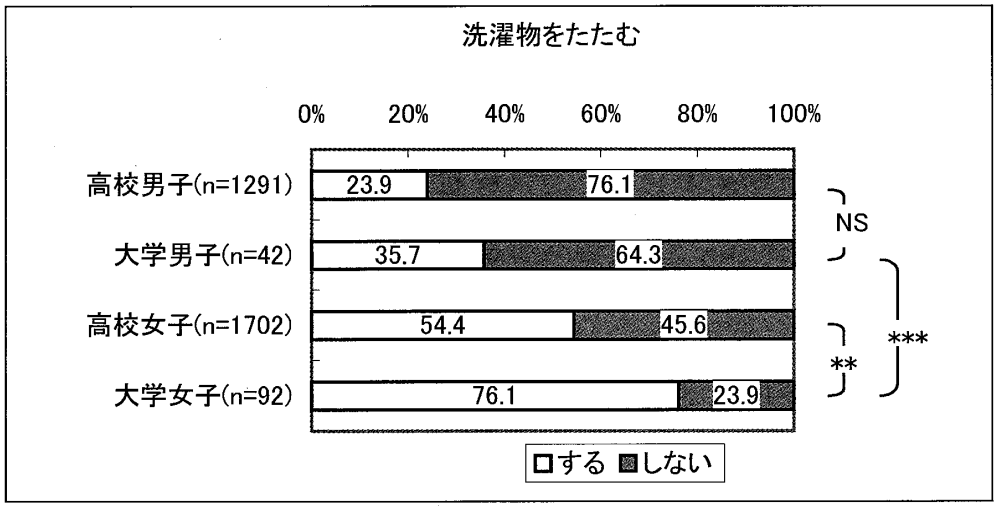

図6「洗濯物をたたむ」 *p<0.05 ***p<0.001 （2×2カイ自乗検定）

男子の実践について高校生では23.9%（309人）、大学生では35.7%（15人）であり、6割から7割が実践していない。これらの間には有意な差はなく、同程度であった。女子について高校生では54.4%（926人）、大学生では76.1%（70人）であり、過半数以上が「洗濯物をたたむ」実践を行っていた。その程度は大学生の方が多かった。男子大学生も有意差はないが実践率は増加している。一人暮らしの経験がこの結果をもたらしていると考えられる。

大学生について注目すると、女子は男子に比べ2.1倍程度、多いことが分かった。男子の実践度を高める必要がある。繰り返し述べるが家の仕事を果たすことは円滑な家庭生活をもたらす。また、親や祖父母と協同して行うことでコミュニケーションの機会になる。これらを理解させなければならない。

③ボタンをつける

衣生活に関わる仕事のうち、「ボタンのとれた時に、ボタンをつける」を実践しているかどうかについて、その割合を図7に示した。

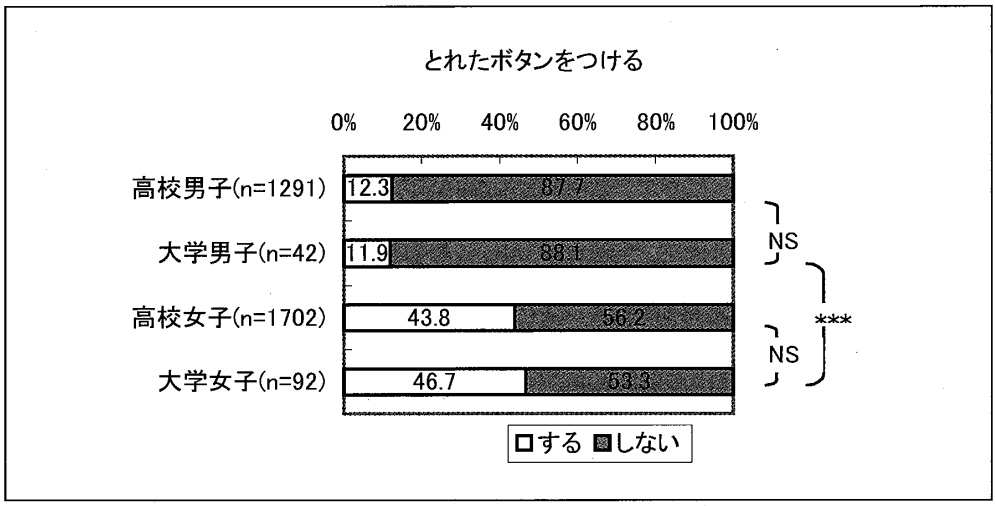

図7「ボタンづけ」 ***p<0.001 （2×2カイ自乗検定）

男子高校生の実践では12.3%（159人）、大学生では11.9%（5人）であり、約1割がボタンづけをしているにすぎなかった。しかも男子の場合「ボタンづけ」は「衣服の洗濯」

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

「洗濯物をたたむ」に比べ、最低である。一方、女子の場合、高校生では43.8%（746人）、大学生では46.7%（43人）であり、約半数の高校生と大学生が「ボタンづけ」を実践し、「衣服の洗濯」よりも多かった。

大学生について注目すると、女子の方が3.9倍多く、実践している。男子がほとんど実践していないことは、小学校家庭科の学習内容が男子に反映されていない。「ボタン付け」は家の仕事である。男女が共に家の仕事をする意義を理解しなければならない。男女が同じように家事技能をすることによって、家の仕事の協力がなされる。これが家庭建設の基盤となることをしっかり認識させる必要がある。

④服装を自分で決める

衣服は個性を表現する手段の一つであり、適切な衣服内気候を保つことによって健康にかつ快適に過ごすことができる。「季節や気候にあった服装を自分で決める」の実践結果を図８に示した。

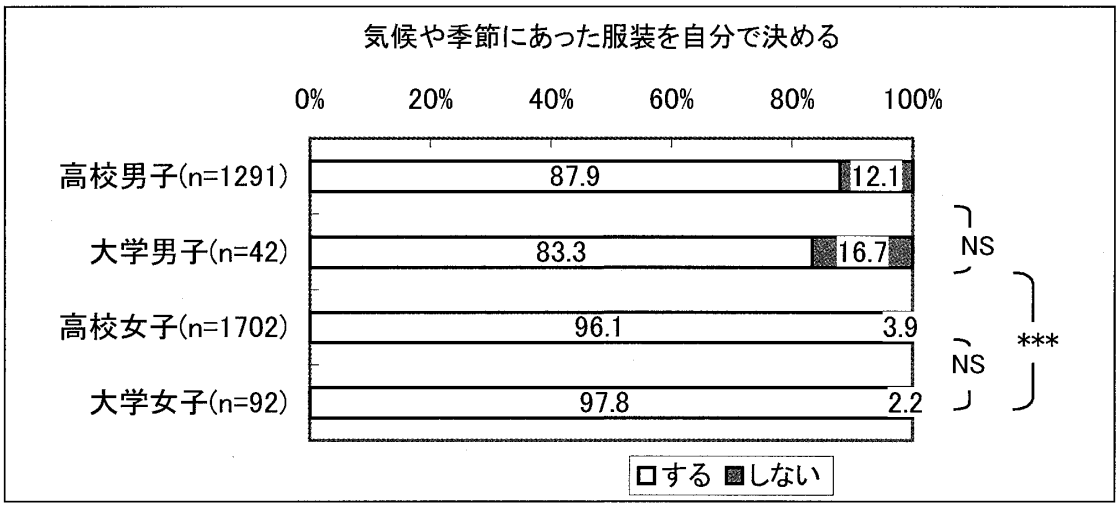

図８「服装を自分で決める」 ***p<0.001 （２×２カイ自乗検定）

男子について、高校生では87.9%（1135人）、大学生では83.3%（35人）が実践している。女子高校生では96.1%（1635人）、大学生では97.8%（90人）であり、女子もほとんどが実践している。

大学生について注目すると、女子の方が実践している割合が多い。「季節や気候にあった服装を自分で決める」は「衣服の洗濯」「洗濯物をたたむ」「ボタンづけ」に比べ、快適な仕事であり、意欲が喚起されたのではないだろうか。

３）パソコン利用

「パソコンを使って暮らしの情報を集める」ことは現代社会に必須なことの一つであろう。結果を図９に示した。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

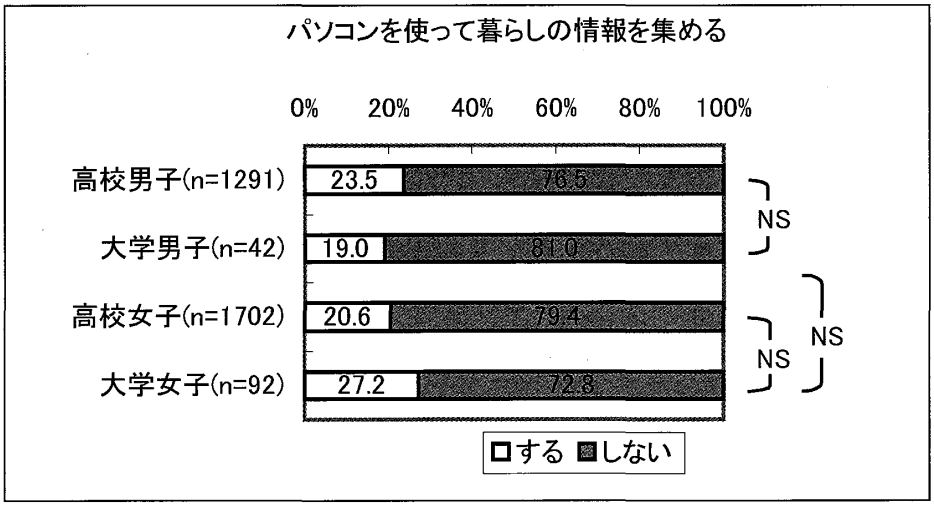

図９「パソコンを使って暮らしの情報を集める」

男子高校生では23.5%（304人）、大学生では19.0%（８人）であり、約２割の高校生と大学生が「パソコンを使って暮らしの情報を集める」ことを実践していた。これらは高校・大学生間に、男女間に差がなかった。実際にパソコンを使って生活情報を集め、役立たせるにはまだ大きな壁がある。パソコン操作の習得に加え、情報を集めて消費生活に役立たせるような教材の少なさがこの結果の要因として考えられる。

2　生活技能の意欲及び理由

1）もっと上手にできるようになりたいこと

食・衣生活に関する仕事の９項目について「もっと上手にできるようになりたいこと」について、その割合を表１に示した。

表１「もっと上手にできるようになりたいことの順位」

もっと上手にできるようになりたいこと（MA）　順位　単位：%

	高校男子	大学男子	高校女子	大学女子
第１位	フライパンや鍋で料理する 60.3	フライパンや鍋で料理する 69.0	フライパンや鍋で料理する 66.2	家族の夕食を作る 85.9
第２位	包丁で食べ物を切る 48.5	包丁で食べ物を切る 61.9	家族の夕食を作る 56.5	フライパンや鍋で料理する 67.4
第３位	パソコンで暮らしの情報を集める 31.7	家族の夕食を作る 57.1	包丁で食べ物を切る 51.2	包丁で食べ物を切る 47.8
第４位	家族の夕食を作る 25.3	とれたボタンをつける 26.2	パソコンで暮らしの情報を集める 23.3	パソコンで暮らしの情報を集める 28.3
第５位	気候季節にあった服装を決める 19.2	パソコンで暮らしの情報を集める 21.4	とれたボタンをつける 18.9	とれたボタンをつける 27.2
第６位	洗濯機で衣服の洗濯 17.5	洗濯物をたたむ 16.7	洗濯機で衣服の洗濯 14.7	気候季節にあった服装を決める 20.7
第７位	とれたボタンをつける 16.6	食器を洗う 14.3	気候季節にあった服装を決める 14.4	洗濯物をたたむ 19.6
第８位	この中にはない 16.3	気候季節にあった服装を決める 11.9	洗濯物をたたむ 9.7	食器を洗う 13.0

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

第９位	洗濯物をたたむ 12.2	洗濯機で衣服の洗濯 11.9	この中にはない 8.8	洗濯機で衣服の洗濯 13.0
第10位	食器を洗う 9.5	この中にはない 9.5	食器を洗う 5.6	この中にはない 5.4

生活に関する仕事9項目で「もっと上手にできるようになりたいこと」の上位は「フライパンや鍋で料理する」「家族の夕食をつくる」「包丁で食べ物を切る」といった食事をつくる技能が並んでいる。特に「フライパンや鍋で料理する」意欲は高校・大学生男女のすべてが６割以上であった。今後の家庭科として意欲を実践に結びつける学習の工夫が重要となる。

「家族の夕食を作る」実践は大学の男子で１割程度であるのに、その意欲は５割強である。これは大学生の一人暮らしの経験が反映されたものとして考えられる。このようにせざるを得ない強制的な調理実践が意欲につながっていることから、家庭科や各家庭で家事技能の実践機会を増やすことが重要となる。さらに男女がこれら意欲を向上させるためには、「夕食作り」の意味づけもしっかり学習させる必要がある。

衣生活の技能「とれたボタンをつける」「洗濯機で衣服を洗濯する」「洗濯物をたたむ」の意欲は食生活で作り上げる技能より下位に位置している。しかし、この中でも「とれたボタンをつける」は上位にある。他の衣生活の技能に比べ、作り上げる要素がある。これが意欲を喚起しているかもしれない。だとすれば、“実習”を家庭科でもっと取りあげていくべきであろう。

２）もっと上手になりたい理由（問5-3）

大学生と高校生が食・衣生活に関する仕事９項目で「もっと上手にできるようになりたい理由」について、その割合を表２に示した。

表２「もっと上手になりたい理由の順位」

もっと上手になりたい理由（ＭＡ）　順位　単位：％

	高校男子	大学男子	高校女子	大学女子
第１位	自分のためになるから 62.2	自分のためになるから 71.4	自分のためになるから 68.9	自分のためになるから 82.6
第２位	大人になったら必要 50.7	大人になったら必要 50.0	大人になったら必要 66.6	大人になったら必要 70.7
第３位	自分のことは自分でしたい 30.1	自分のことは自分でしたい 26.2	自分のことは自分でしたい 23.3	自分のことは自分でしたい 33.7
第４位	その他 9.4	その他 14.3	男・女だから 13.1	使うお金が少なくてすむ 12.0
第５位	使うお金が少なくてすむ 5.6	使うお金が少なくてすむ 11.9	その他 7.3	その他 8.7
第６位	男・女だから 2.7	男・女だから 0.0	やりなさいと言われるから 4.2	男・女だから 4.3
第７位	やりなさいと言われるから 1.9	やりなさいと言われるから 0.0	使うお金が少なくてすむ 3.6	家庭科で勉強するから 2.2
第８位	家庭科で勉強するから 1.4	家庭科で勉強するから 0.0	家庭科で勉強するから 1.5	やりなさいと言われるから 1.1

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

全高校生・大学生とも生活技能向上の意欲の理由について多いのは「自分のためになる」「大人になったら必要」「自分のことは自分でしたい」の順である。家事技能の習得を児童・生徒の自立の側面からとらえるとこのような理由になってしまう。もちろん、このような面の重要性は理解しつつも、家事技能の実践は家族の一員としての帰属観を高める働き、家庭の生活を円滑にする働き、家族のコミュニケーション機会を得る働きなどがあることを理解させなくてはならない。したがって「家族のためになるから」が理由としてあるべきであり、こうした家庭科観がこれから必要である。

まとめ

上述した結果をまとめ、家庭科教育の課題と今後どうあるべきかについて述べていく。

i）食生活・衣生活の技能について高校生、大学生とも女子の方が圧倒的に実践していた

ii）大学生の男女間の生活技能実践比率に注目する（「服装を自分で決める」、「パソコン利用」を除く）と女子の方が男子に比べ2.1倍から3.9倍も実践していた。

iii）女子による「食べ物を切る」「フライパンやなべを使った料理」「食器を洗う」は高校生、大学生とも過半数以上が実践し、自立生活経験の有無による違いは見られなかった。

iv）女子による「夕食をつくる」では自立経験のある大学生の方が高校生よりも多く、帰省しても約4割が実践していた。

v）女子による「洗濯物をたたむ」では自立経験のある大学生の方が高校生よりも多く、帰省しても約7割以上が実践していた。

vi）これから上手になりたい意欲は「食生活」が上位を占めた。特に「フライパンや鍋で料理する」意欲は男女の高校・大学生で6割以上を占めた。

vii）「夕食をつくる」意欲は女子大学生8割強＞女子高校生＝男子大学生6割弱であった。高校生男子は極端に低く2割強であった。

家庭科で目指した「日常生活に必要な基礎的な知識と技能」の実践は「男女が協力して家庭生活を築いていくこと」とリンクされなければならない。それは結局、家庭生活の理解につながり、家庭教育力の向上に発展していく。しかし、生活技能の実践では歴然とした男女間の違いがあり、男子は低かった。男子が過半数を越えて実践しているのは「服装を自分で決める」のみであり、残り食生活、衣生活の技能8項目の実践は1割から3割に過ぎなかった。これでは女子のみが家庭を顧みる存在であり、「男女が協力して家庭生活を築きあげる能力を育てること」にはなっていない。このようになってしまった一因として家事は「女子がするもの」という生徒・学生の家庭環境が背景にあるかもしれない。しかしそれだけではない。おそらく、現場の教師が学習指導要領改訂の観点を十分くみ取ることなく、授業をしていたのではないだろうか。著者（入江）は山口県下の中学校家庭科の授業参観をする機会があるが、「家庭の仕事は家庭の生活を円滑にするために直接かかわってくるものであることに気づかせ、重要性を認識させる」「男女が協力して家庭生活を築いていくこと」の観点からリンクされた授業をほとんど見たことがない。

ではどうしたらよいのか。教師を目指す学生の意識改革をおこなう必要がある。家庭崩壊や家族問題を未然に解決できる強固な家庭教育力の発揮により、円満な家庭は築くこと

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

ができる。その基盤形成に男女が同じ程度に実践できる家庭の生活技能力が必要となる。このような観点をもった教師育成をめざし、今後の大学の家庭科授業を実践していかなければならない。

参考文献

1）津止登喜江ほか「中学校学新教育課程の解説」第一法規　（平成元年）
2）櫻井純子「中学校学新教育課程の解説」　第一法規　（平成元年）
3）日本家庭科教育学会「児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築―家庭生活についての全国調査の結果―」(2002)

NII-Electronic Library Service